

【連載】鎌倉における『吾妻鏡』に記された陰陽師等の方位表記とその位置について (1)

玉林美男 (文化財課遺跡発掘調査研究員)

はじめに

『吾妻鏡』の鎌倉における陰陽師の方位表記については、若宮大路を方位軸線と捉え、これを南北とする考え方と、通常の子午線を南北とする考え方がある。

『鎌倉市史 総説編』で、高柳光寿氏が若宮大路を子午線としている例があることを述べⁱ、川副武胤氏は『鎌倉市史 社寺編』「明月院附最明寺」で『吾妻鏡』正嘉元年(1257)八月十七・十八日条の大慈寺供養における最明寺・永福寺・大慈寺の位置関係の方位計測記事、建長四年(1252)五月五日の亀ヶ谷の方角に関する位置計測記事から「仮説ではあるが」としながら、「この陰陽師達の方角は若宮大路の線を子午線(南北)としたものではなかろうか。」と具体例を述べているⁱⁱ。さらに川副氏は「鎌倉時代鎌倉の方位の観測について」ⁱⁱⁱで『吾妻鏡』寛喜三年十月十六日条(イ)、建長四年五月五日条(ロ)、正嘉元年八月十七日条(ハ)を引き、すなわち(イ)は子午線、(ロ)は不明、(ハ)では「最明寺・大慈寺が辰戌の方位を示すといふのは、子午線(正南北)を軸としてほぼ正しいけれども最明寺・永福寺が卯酉といふのは、子午線を軸とする限り、明らかに観測の誤りで、実際には永福寺も大慈寺も、山内最明寺に対する方位としては大差がなく、後者はせいぜい“乙辛”(卯酉から北へ一五度)ぐらいに報告すべきであったらう。そこで若しも若宮大路の線を軸としてこれを“子午線”に見立てれば(正子午線に対して二七度北北東-南南東の方向に傾く)、上記の永福寺・最明寺間の観測は正しくなるが、それでは今度は大慈寺・最明寺の辰戌が誤となる。さうなるとまた、さきの(イ)の説明もできない。そこで“若宮大路子午線説”は採用できなくなるが、一方(イ)《ハの誤り 筆者》において、「先年」云々として、正南(午)を“辰”としたところがあるとみると、これ以前に若宮大路を南北の軸に見立てたことがあるか、又はそれとの混同を生じたかにも見受けられる。さう考へなければ午の方角を辰とするのは、いくら当時の観測法が幼稚であったとはいへ、誤差といふには大きすぎる(六〇度)からである。」と結論付けている。

以後、この論文が若宮大路を子午線とする論の根拠となるが、六〇度の差は若宮大路を子午線としても解決できる差異ではなく、新説を提示するには非常に根拠の薄弱なものである。

しかし貫達人・阿部正道氏はこの川副氏の論を肯定して踏まえ、『日本の考古学 歴史時代 下』^{iv}で『吾妻鏡』後編には方角を示す記事が少ないが、現在確かめることができる記事はいずれも、南北の線が南南西にふれており、若宮大路を正南の方向とするとぴったり合う。これはおそらく、京都下りの陰陽師たちが、京都では朱雀大路を基準に方位をしめしたくせがぬけず、若宮大路を基準としたからであるとおもわれる。」と述べている。

一方、鈴木千歳氏はこうした事例を認めず^v、鈴木良昭氏は鈴木氏の意見を踏襲し^{vi}、松尾剛次^{vii}・秋山哲雄両氏は川副氏の稿^{viii}を引用文献で引いたうえで、すでに川副・貫・阿部各氏により正常な子午線の事例が認められているにもかかわらず、鎌倉時代には若宮大路を子午線としているとの立場をとっている^{ix}。また河野眞知郎氏は若宮大路基準線説にはふれず、正南北を基準線としており、「鎌倉時代の中期頃までは鎌倉の陰陽師たちは鎌倉の正確な地図を持っていなかったようだ。鎌倉時代末には寺院の境内図が多く描かれるようだが、彼らはその前段階にいたのか、あるいは『方向を糺す』パフォーマンスを(事実と異なっても)することが大事だったのかもしれない。」と述べ、方位測定の信憑性に疑問を投げかけている^x。

『吾妻鏡』には方位表記から将軍の方違えの場所や北条氏などの館の位置が特定できる記事がある。そこで『吾妻鏡』に記されたいくつかの陰陽師による方位表記について、その場面を復元しながら方位表記について検討し、鎌倉での方位認識の実態を明確にするとともに、併せて方位表記の対象となった場所について私見を

述べてみたい。なお、方位については松尾剛次氏の「和漢方位盤図と付表」を使用した。「和漢方位盤」(文末【参考資料】)によれば方位を24分割し、十干と十二支により表記する。例えば北(子)は15度の幅を持ち、その中心線の左右両側に7.5度の領域を持つ。『吾妻鏡』には方位表記に「丁」とした記事^{xii}があり、これは正南を表す午の西側一五度の領域を表す方位である。これから24分割での表記であることが分かる。また東西南北については各々90度の範囲とし、「正」がつく場合は両側に7.5度の幅員を持つ15度の範囲とした。また艮・巽・坤・乾も15度の範囲とした。

1. 最明寺・永福寺・大慈寺の位置関係

『吾妻鏡』正嘉元年八月十八日条と鈴木千歳氏の理解

『吾妻鏡』正嘉元年(1257)八月十八日条に「陰陽師等参評定所、各申云、今朝未明、先登西御門山、于時残月在西、日出東、彼是紵方角、自最明寺指大慈寺、相当辰戌、最明寺・永福寺相当卯酉」という記事がある。川副氏の若宮大路子午線説の根拠となった記事である。この記事について詳しく考証しているのは『鎌倉市史社寺編』^{xiii}と鈴木千歳氏のみであるので^{xiiii}、まずその説を紹介しておこう。

鈴木氏は『鎌倉市史 社寺編』の記事、「いまの地図によってこの記事を検討するに少々誤差位ではない。この日は八月十八日(旧暦)であって丁度日はほぼ真東からでたと思われるが、いかに中世の陰陽師が無智だからといって、これほどの好条件で方向を誤ろうとは考えられない。そこでこれは仮説でこう考えてみても誤差はあるのではあるが、この陰陽師たちの方角は若宮大路の線を子午線(南北線)としたのではないだろうか」を引き、「百聞は一見に如かず、この仮説を実際に地図で確かめてみよう。吾妻鏡に記された条件を満たすためには、次の作業をすればよい。まず地図上で大慈寺を十二所二ツ橋の通説史蹟指導石碑の地点①とし、永福寺を②とする。③は現存する明月院である。鎌倉市史の仮説通り①および②の点上に若宮大路の平行線を描き、これを南北と仮定し、①より戌、②より酉の方位線を記入し、両者が交わっている部分に最明寺が存在すればよいわけである。すなわち地図⑩におけるA・Bの二線で戌(北西(乾)と西の間)の方向をあらわす。C・Dは酉(西)の方向をあらわす。この作業の結果、仮説による方位線は辛うじて明月谷北の山頂を通過する。しかしその立地条件は平地に乏しく寺域としては不適格な場所である。(中略)建長寺を創建した時頼にして最明寺に限ってかかる悪条件の山頂に造営したとは考え難い。(中略)その寺域はかなり広い敷地だったと推考できる。以上の理由によって、鎌倉市史の仮説をもってしては吾妻鏡の記事を合理化しえないのである。」^{xiv}と結論している(図1)。

鈴木氏の論は『吾妻鏡』の記事を、若宮大路を子午線にして永福寺の戌、大慈寺の酉の方向に最明寺があるとされ、最明寺からはそれぞれ辰・卯の方向に永福寺・大慈寺があると検証された。その作業の結果「明月谷北の

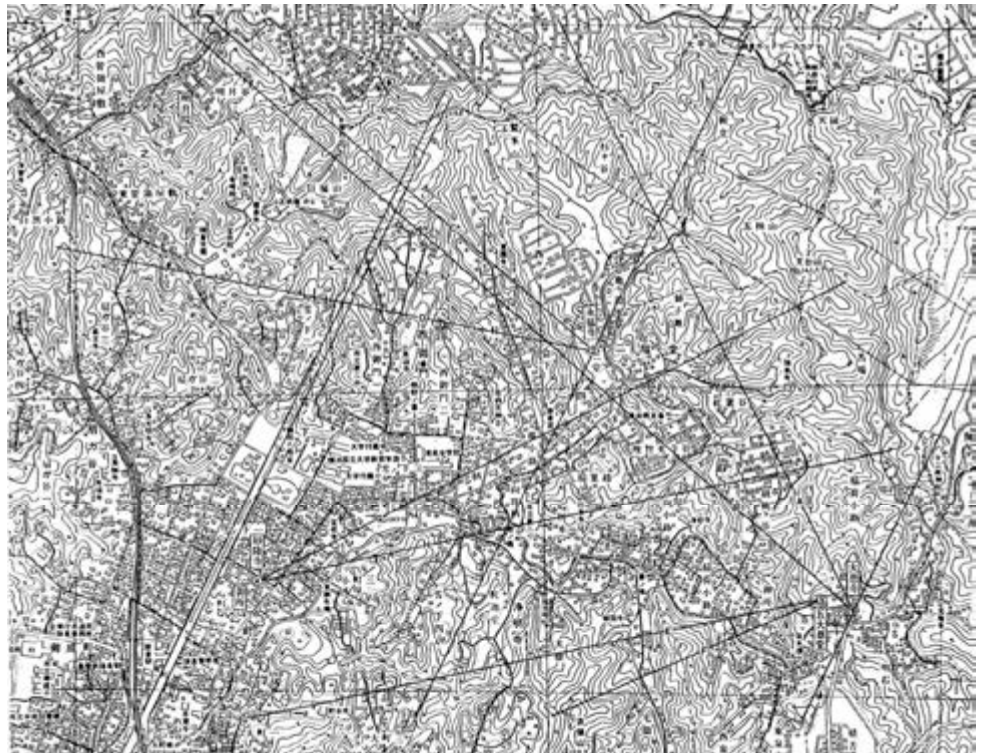


図1 鈴木千歳氏図(地図⑩)

山頂を通過する」とし「鎌倉市史の仮説をもってしては吾妻鏡の記事を合理化しえない」として、「仮説による方位線は辛うじて明月谷北の山頂を通過する」のみであるとしている。その作業の中で、鈴木氏は子午線を基準とし、「永福寺は杉ヶ谷の奥に建てられ、二階堂は小字三堂に建てられ、両寺は寺院としての性格を異にし、敷地も決して同一地域ではなかったのである」^{xv}として、二階堂字杉ヶ谷の奥に永福寺の位置を、二階堂字獅子舞に大慈寺を想定している。

しかし、鈴木氏が推定する地で、過去に行われた発掘調査の結果では、それに対応するような寺院跡は発見されておらず、土地の利用も13世紀後半以降とされており、永福寺の創建年代と一致しない^{xvi}。

『吾妻鏡』正嘉元年八月十八日条と河野眞知郎氏の理解

河野氏は「資料前段では『西御門の山』と言っているが、旧大倉御所の西の方といえば鶴岡八幡宮の北の“大匠山”か、それに連なる尾根のことであろう。海拔七十メートル余りのそこからでは、大慈寺は何か目印があれば見通せるかもしれないが、最明寺は建長寺北西の尾根にさえぎられて見えないはずである。やはり大きなかり火でも焚いたのだろうか。そして、最明寺と大慈寺の方位関係は辰（東南東）と戌（西北西）であるが、最明寺と永福寺はどう見ても卯（東）と酉（西）の関係にはならない。登った山が二地点の中間近くに当たらなかったためもあるが、『永福寺は谷を北へ入ったあたり』というような普通の思い込みが、直接見えにくい所を誤らせてしまったのであろう。（中略）陰陽師たちは（中略）あるいは『方角を糺す』パフォーマンスを（事実と異なっている）することが大事だったのかもしれない。」と述べ、せつかく「卯（東）と酉（西）」と述べながらも卯酉を方位盤による方位表記ととらえているだけでなく、陰陽師の方位の見極めを「パフォーマンス」ととらえている。

『吾妻鏡』正嘉元年八月十八日条の分析

それではもう一度『吾妻鏡』の記事に戻って再検討してみよう。分かりやすいように現代語訳を引用^{xvii}してみると、「陰陽師らが評定所に参り、それぞれ申した。『今朝の未明に、まず西御門の山に登りました。この時、残月は西にあり、日は東に出ていました。これらのことから方角を考えますと、最明寺から大慈寺の方は辰・戌の方向に当たります。最明寺から永福寺は、卯・酉の方向に当たります。』」とある。

まず、時系列に従って検討してみると、この記事の発端は前日十七日評議が行われ、大慈寺供養のため將軍宗尊親王の方違を行うことになり、御本所を最明寺にすることが決まったが、陰陽師が大慈寺は最明寺から東の方角に当たりよろしくないとしたため、日の出前に山の上に登り、方角を明らかにするよう命じられたためであった^{xviii}。陰陽師らはまず西御門山に登っている。

この山を検討してみると、西御門にある山は、東側の法華堂跡の裏山か、西側の鶴岡八幡宮の裏山か、字では荏柄天神社の裏山も想定される。最明寺の位置が問題であるので、最明寺の位置が確認でき、見晴らしの利く周囲より高い場所を考える必要がある。「最明寺」は北条時頼の持仏堂から発展した寺院で、この記事の前年、康元元年（1256）十一月大二十三日に北条時頼は最明寺で出家しており、時頼の山ノ内邸である。「重要文化財 円覚寺境内絵図」の円覚寺の右側に位置が示されている（図2）。ここと位置が判明している「永福寺」を結んでみる。永福寺は鎌倉市二階堂字三堂を中心に伽藍や僧房があった源頼朝が創建した寺院である。鎌倉市教育委員会によって発掘調査が行われて中心伽藍や池などが発見され、史跡公園と



図2 重要文化財「円覚寺境内図」(部分) 円覚寺

して公開されており、中心堂である二階堂（永福寺）の位置は確定している。永福寺については既に『鎌倉市史 総説編』・『鎌倉廃寺事典』により永福寺の中心堂二階堂が永福寺の寺号を持つとともに、寺院全体の名称も永福寺であったとする見解が定着している。先に述べたように、獅子舞の地には永福寺が創建された 12 世紀末の遺構は存在しない。「重要文化財 円覚寺境内絵図」の最明寺の地点と永福寺中心伽藍の跡の二点を結んでみると鶴岡八幡宮御谷と建長寺との境にあたる位置に狻猊峰（さんこほう）と呼ばれる尾根の頂がある。ここは修行の場と伝えられる独立した岩山で、現在でも社の残骸が残っている。鎌倉駅ホームからも見え、昭和 39 年の「おやつ騒動」では史蹟保存のシンボルとなった場所である。ここが付近の最高峰であるから、最明寺の位置を確認するにはここに登ったと考えてよいだろう。

この記事では、日と月の位置が東西であることを述べ、次に最明寺・大慈寺の位置が「辰戌」の方向であることが述べられている。日月の方向は東西南北で述べており、方位盤の方位では述べられていない。この場合、本来の東西の方向を確認したということであろう。

作図をしてみると大慈寺の位置は地元の伝承通り二ツ橋・明石の位置に推定される。以下、ここを推定地として論を進めていく。

「卯酉」の考え方

この記事の後段で大慈寺とは直接関係ない永福寺の位置がわざわざ見定められているのは、永福寺の方向が大慈寺の方向を見定める重要な要素となっていたからであろう。ここで最明寺と永福寺の方向を「卯酉」と言っているが、先にふれたように永福寺と大慈寺は西御門の山（狻猊峰）を起点に「辰」の方角に当たる。同じ地点を起点を同じくして違った方位で表すには方位軸線の移動しかないから、これにより高柳光寿・川副武胤両氏は若宮大路軸線の想定をし、貫達人・松尾剛治・秋山哲雄各氏はそれに同意しているわけであるが、そもそも問題となる最明寺・大慈寺の方位を子午線で表現し、その後、同じ方位である最明寺・永福寺を若宮大路軸線で表現することの説明がつかない。確かに「卯酉」の方位は 30 度東に軸線をずらし、丑未を軸線としなければ方位表現としては出てこない。しかし、こうした理解では、最明寺を取りやめ薬師堂ヶ谷の壱岐前司佐々木泰綱の薬師堂谷の山荘に決定^{xix}したことの関連が分からないのである。

そこで「卯酉」は方位盤の方位表現ではないのではないのかという疑問が湧いてくる。同じ大慈寺供養の記事『吾妻鏡』正嘉元年十月一日条では「東廊内構執権御聴聞所丈六堂卯酉廊内敷御布施取公卿殿上人座」とあり、起点を示さず方位を述べている。「丈六堂卯酉廊」は「丈六堂東西廊」と読み直すことが可能であるから、その傍証となる。すなわち、起点を示さない表現であれば「卯酉」を「東西」とかえてもその意味は変わらないのである。『永久五年請雨経御



図 3 最明寺・永福寺・大慈寺方位図

修法支度記』(続群書類従第七百二十八)には南北表記であるが、「又池北亭。子午五間屋東西庇」「又去幾三間卯西屋是供所」「北六間子午屋」とある。東西、南北の表記が連続する場合、連続する方位表記の後で出てくる方を方位盤による十二支表記で卯西・子午と表記するのではないであろうか。『吾妻鏡』正嘉元年(1257)八月十八日条では西御門の山で東西の方向を日の出の太陽の位置と残月の位置で確認しており、最明寺と永福寺の方向がそれぞれその方向と一致したため、東西関係にあることを「東西」の方位盤表記である「卯西」と表したものと理解できる。よって、当該記事により鎌倉の陰陽師が方位軸として若宮大路軸を用いたとは言えないのである。



図4 最明寺・薬師堂ヶ谷老岐前司佐々木泰綱山荘の東の領域



図5 「覚園寺境内図」 覚園寺

「方違いの本所」の決定とその推定地

前述した狻猊峰を起点として辰戌の方向を示したのが図3である。大慈寺供養における宗尊親王の方違いの本所は大慈寺を東の領域に含む場所が忌避された。最明寺から東の領域を示したのが図4である。ここからは十二所字明石を含む大慈寺跡推定地が含まれている。このため老岐前司佐々木泰綱の薬師堂谷の山荘に決定したのであろうが、図3の西御門の山から「辰」を示した範囲以南は大慈寺を東の領域に含む可能性がある。さらに谷戸の奥、「字平子」は後に北条貞時により北条義時の薬師堂を移して覚園寺の境内となる区域である。覚園寺は図5に示される境内図^{xx}があり、谷戸の中央から東の尾根に上る道の分岐点に大門があり、それ以北が境内であったことが分かる。東方に大慈寺を含まない場所は図5で示した大門周辺以北である。この区域は「老岐前司佐々木泰綱の薬師堂谷の山荘」の候補地として良いであろう。^{xxi}その推定地は薬師堂谷の中ほどより奥の地になる。

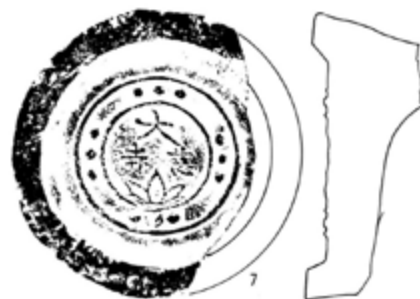


図6 大慈寺跡出土大慈寺銘瓦

大慈寺の位置と伝承地

大慈寺の位置については大倉の奥^{xxii}であることはわかるが、特定されていない。当該記事では最明寺・大慈寺の方向は西御門山の観測点から測って「辰戌」に相当するという。これを狻猊峰を起点とし、地図上で示すと図3となる。「戌」の方向には最明寺が含まれる。「辰」の方向には西御門を除けば、二階堂字中村・会下・三堂・理智光寺ヶ谷、浄明寺字胡桃ヶ谷、十二所字二ツ橋・明石・明石谷・宇佐小路・鑪ヶ谷・稲荷小路等が含まれる。二階堂字中村・会下は薬師堂ヶ谷の内である。二階堂字三堂

は永福寺の境内、字理智光寺ヶ谷は理智光寺境内、浄明寺字胡桃ヶ谷は大楽寺境内、十二所字二ツ橋は明王院境内および大慈寺丈六堂跡の伝承地である。明石・明石谷も大慈寺跡の伝承地である。稲荷小路は月輪寺跡の伝承地である。

十二所の地元有志でまとめられた『十二所地誌新稿』では大慈寺を常楽と下常楽との間にあり、裏山を阿弥陀山といったとある。阿弥陀山は切り開かれて栄光学園用地^{xxiii}、現在はイエズス会黙想の家となっている。土地造成工事に際し石櫃が出土し、中から火葬骨と共に三鈷杵が出土している^{xxiv}。位置からすると明王院に隣接した東側である。「十二所地誌新稿」は「明治十二年(一八七九)四月に名主小長井啓左衛門と神奈川県内田赫一郎と調査した報告文に『大慈寺旧蹟は南方字明石にあり』と伝えられたが、今は田地となり、里人その地を鐘楼堂と呼ぶ」と報告しているが、その説を否定し、前記のようにしている。

大慈寺跡に関する地誌の記録と考古学的資料

それでは大慈寺の位置はどこであろうか。推定地については明王院東隣^{xxv}、明石谷^{xxvi}、桐沢^{xxvii}、亀ヶ淵^{xxviii}がある。光触寺所蔵の大慈寺本尊と伝えられる仏頭は『新編鎌倉志』「梶原屋敷 附大功寺舊跡」には「今此所に、大なる仏像の首ばかり、草庵に安置す。按ずるに、【東鏡脱漏】に、安貞元年四月二日、大慈寺の郭内に於て、二位家平政子第三年忌のために、武州泰時、丈六堂を建てらるとあり。此所大慈寺へ近ければ、疑らくは其丈六仏の首ならん歟」とあり、江戸時代には現明王院の西側の草庵に安置されていたことが分かる。文政十二年(1829)に編せられた『鎌倉攬勝考』には同様の記事を載せるが、天保十二年(1841)に成立した『新編相模国風土記稿』では「丈六堂」の項に「字丈六にあり、往昔大慈寺今廢す、域内の堂なり、丈六彌陀を安置せり故に名とす、今その佛首のみを置く大寸三尺許横二尺」と記し、『吾妻鏡』の記事を引用している。江戸時代末期になって仏頭の所在地が移動したことが分かる。



図7 十二所字二ツ橋臼井邸の位置

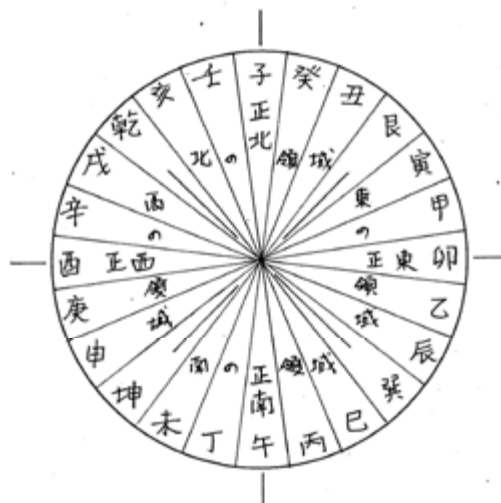
考古資料では、明王院東隣と宅間ヶ谷入り口で「大慈寺」の銘が入った軒丸瓦が採取されており（図7）、浄明寺地区でこれと対になる軒平瓦が採取されているという^{xxix}。瓦の出土は寺院址を考える場合重要であるが、鎌倉では街中の寺院址ではないところでも瓦は出土するので注意が必要である。明王院東隣の地には、「丈六」の地名が残り、さらに「大慈寺」銘瓦が出土しており、位置の特定に重要な要素となっている。

『新編相模国風土記稿』では「大慈寺廢址 今旧跡五大堂の脇南の谷ニアリ」と記し、別に「丈六堂 字丈六ニアリ。往昔大慈寺城内ノ堂ナリ」として、大慈寺境内にあった堂であると述べている。すなわち『新編相模国風土記稿』では「大慈寺廢址」と「丈六堂」は別の区画にあり、「丈六堂」は「往昔大慈寺城内ノ堂ナリ」とされている。『新編鎌倉志』にも「大慈寺舊蹟は、五大堂と、光触寺との間、南の谷にあり」とある。このことに、従来注意が払われていない。『新編相模国風土記稿』で述べる「今旧跡五大堂の脇南の谷ニアリ」の脇南の谷は明石ヶ谷である。前述した『十二所地誌新稿』では「丈六堂は大慈寺の本堂と考えられ、里人の伝承によると二十五間（約五十米）四方の大堂で、丈六（四米七十糎）の阿弥陀仏を安置したが、火災の時その頭だけを出し、後に辻堂を建て奉安した」と伝えている。大慈寺には二つの丈六堂があった訳であるが、この明石谷丈六堂と明王院東丈六堂とはどのような関係であったのだろうか。

近代以降の大慈寺跡の記録については、先に引用した『十二所地誌新稿』によれば『大慈寺旧蹟は南方字明石ヶ谷にあり』と伝えられたが、今は田地となり、里人その地を鐘楼堂と呼ぶの一節があるが、それは大慈寺とは別である。大慈寺は常楽（今は栄光学園用地）と下常楽（オキと称し臼井由雄氏宅）との間にあったと云う。今塔あり裏山を阿弥陀山と称し、朱印地であったが、今は敷地山林とも民有地である。（中略）丈六堂は大慈寺の本堂と考えられ、里人の伝承によると二十五間（約五十米）四方の大堂で、丈六（四米七十糎）の阿弥陀仏を安置したが、火災の時その頭だけを出し、後に辻堂を建て安置したと。明治維新の時廢堂となって仏頭を光触寺本堂に安置した。高さ一米二十糎、幅七十五糎ある。その跡には玉石があり、大きなものは八〇〇キロもあったが、大部分は大塔宮造営の時に売却したと伝える。今は大部分栄光学園の用地となって以前の面影は判らない。（中略）いま明石橋の事を馬橋というのは大慈寺入り口にあつて、昔この橋で馬を下りたから云われるようである。」と私見を加えて述べている。常楽は丈六の事であろうか。また「○常楽寺の跡 今の栄光学園入り口の辺にあつた。右二ヶ寺は古絵図にあるが古跡など一切不明」とある。常楽と下常楽との間は何処に当たるものなのか、文章上よくわからない。先述した『鎌倉国宝館図録 第十八集 鎌倉の中世出土遺品』では栄光学園用地（現イエズス会黙想の家）を能満寺跡としているが、堂跡の事は触れられていない。『十二所地誌新稿』には「○能満寺の跡（上の寺か） 能満寺は川の上の裏山、学園の辺にあつて『上の寺』と称した」とあり、付属する地図には明王院の東に接して大慈寺丈六堂を示しているが、常楽寺の表記はない。臼井由雄宅は『鎌倉市明細地図 昭和41年版全域踏査』^{xxx}によれば十二所二ツ橋63番地にあり山の下にある（図7）。

二つの丈六堂と大慈寺の範囲

建保二年（1214）七月二十七日に行われた大慈寺の本堂供養に際して本尊の記載はない。しかし、以降、丈六仏が造立され続けることから、また將軍の寺として、丈六以上であった可能性は高いであろう。寛喜元年（1229）七月十一日には政子の三年忌供養のために造られた丈六阿弥陀堂の開堂供養が行われ、次いで嘉禎三年（1237）三月十日に明王院の東に故禪定二位家の十三年忌に当たるため、丈六堂を新造されることについて審議が行われ、六月二十三日に大慈寺郭内の新造の丈六堂の供養が行われた^{xxxi}。このうち政子十三年忌の丈六堂は明王院の東であり、『新編相模国風土記稿』の伝承と矛盾しない。このことから大慈寺跡は十二所字明石を主たる範囲とし、滑川を挟んで字二ツ橋の小名丈六の周辺に及ぶ範囲と考えられる。



【参考資料】「和漢方位盤」
（玉林作成）

-
- i 高柳光寿 「四車大路」『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館 鎌倉市 初版 1959 年 10 月 第 3 版 1972 年 10 月 272 ページ。氏は『吾妻鏡』の北は北北東を指していたのではないかと述べている。
- ii 川副武胤 「明月院 附最明寺・禅興寺」『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館 鎌倉市 初版 1959 年 10 月 第 3 版 1972 年 10 月 332 ページ～333 ページ
- iii 川副武胤 『日本歴史』382 号 日本史研究会編 吉川弘文館 1980 年 10 月
- iv 貫達人・阿部正道 「3. 鎌倉」『日本の考古学 歴史時代 下』142 ページ 河出書房新社 1967 年 8 月 初版、1973 年 10 月 第 1 刷(新装版)
- v 鈴木千歳 「鎌倉史蹟疑考」『鎌倉古絵図・紀行一鎌倉紀行編』東京美術 鈴木棠三編著 1976 年 6 月 所収
- vi 鈴木良昭 「異説・明王院五大堂考 一創建とその所在位置をめぐって一」『鎌倉』鎌倉文化研究会 第 121 号 2016 年 8 月
- vii 松尾剛次 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館 1993 年 12 月 55 ページ
- viii 川副武胤 前掲 iii
- ix 秋山哲雄 『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』吉川弘文館 2010 年 8 月 103 ページ
- x 河野真知郎 「呪術と陰陽道の鎌倉」大航海 No.14 1997 年
- xi 『吾妻鏡』嘉禎二年四月小四日条。この記事では將軍頼経が方違えのため小山下野入道生西の若宮大路の家に渡られるにあたり、その家が御所から坤の方角に当たるのではないかと疑念が生じたため、陰陽師らが丈尺を打ち計測したところ、丁の方角であると報告している。五味文彦・本郷和人・西田友広編 『現代語訳 吾妻鏡 10 御成敗式目』2011 年 5 月 吉川弘文館の当該部分の注 (231 ページ) では「丁の方角 南と南東との間」としている。
- xii 川副武胤 「明月院 附最明寺・禅興寺」『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館 鎌倉市 1959 年 10 月 331～332 ページ
- xiii 註 v 「大慈寺・その位置」209～212 ページ
- xiv 註 v 同上
- xv 註 v 225 ページ
- xvi 福田誠 他「永福寺跡 (No.61) 二階堂字獅子舞 603 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 13 平成 8 年度発掘調査報告書 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会 1993 年 3 月
汐見一夫 他「永福寺跡 (鎌倉市 No.61) 二階堂字亀ヶ淵 247 番 13 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 22 平成 17 年度発掘調査報告書 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会 2006 年 3 月
- xvii 五味文彦・本郷和人・西田友広編 『現代語訳 吾妻鏡 14 得宗時頼』2014 年 3 月 吉川弘文館 127～128 ページ
- xviii 『吾妻鏡』正嘉元年八月十七日条
- xix 『吾妻鏡』正嘉元年八月十八日条
- xx 『鎌倉国宝館図録 第十五集 鎌倉の古絵図 I』編集 三浦勝男 発行 鎌倉市教育委員会 鎌倉国宝館 1968 年 3 月初版 1992 年 11 月再版
- xxi 覚園寺の創建は北条貞時による後年の事であるから、薬師堂ヶ谷の奥に推定することも可能であろうが、谷戸造成がまだ進んでいない当該時期に谷戸奥に推定地を求めることは合理性がないと考えられ、谷戸の入り口に近い所に存在したのでであろうと考えた。
- xxii 『吾妻鏡』建暦二年四月十八日条
- xxiii 十二所文化部同人「十二所地誌新稿」『鎌倉』第 35 号 1980 年 9 月 鎌倉文化研究会
- xxiv 鎌倉国宝館図録 鎌倉の中世出土遺品
- xxv 鎌倉町青年団史蹟指導石碑 貫達人・川副武胤編 『鎌倉廃寺辞典』有隣堂 1980 年 12 月
- xxvi 『新編鎌倉志』『新編相模国風土記稿』『鎌倉攬勝考』『皇国地誌』
- xxvii 『五大堂事蹟備考』
- xxviii 註 iii 216 ページ
- xxix 竹澤嘉範「神奈川の中世瓦」『神奈川の中世瓦集成図録』横須賀考古学会 1990 年 11 月 4・5 ページ 摺影図 38A22-7、摺影図 56A19-1。軒平瓦は未掲載。
- xxx 有限会社 鎌倉明細地図社 昭和 40 年 12 月 20 日発行
- xxxi 貫達人・川副武胤 『鎌倉廃寺辞典』1980 年 12 月 有隣堂 「大慈寺」124～136 ページ